

# イネ白葉枯病情報第1号

令和2年7月31日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

**7月下旬に尾張地域でイネ白葉枯病の発生が確認されています  
早い時期に感染し、出穂期までに発生が多いと減収につながります！**

## 1 発生状況

7月下旬に尾張地域の一部ほ場でイネ白葉枯病の発生を確認しています。発生を確認している品種は主に中生種のあいちのかおり SBL で、生育ステージとしては分けつ期～幼穂形成期とみられます（ほぼ平年並の生育、7月8日発表の稲作管理支援情報による）。発生予察ほ場でも発病を確認しており、7月下旬での発生は過去10年では確認していなかったことから発生時期が早いと言えます。なお、西三河地域及び東三河地域では、今のところ発生を確認していません。

昨年（2019年）は8月上旬に初発を確認した後、9月上旬までに尾張地域の広範囲でイネ白葉枯病が発生し、発病株率が100%に達する水田も多く見られました。また、西三河地域や東三河地域でも、発生量は少ないですが、イネ白葉枯病の発生が確認されました。

## 2 イネ白葉枯病の病徴と感染経路

イネ白葉枯病の細菌はイネの葉縁にある水孔や傷口から侵入するため、感染すると葉縁部が白く枯れます（図1）。さらに病気が進行すると、葉先が白っぽくなるため、本病が多発した水田は一面に白くなります（図2）。

本病原菌は畦畔や水路に自生するサヤヌカグサという雑草の根に寄生し、越冬します。翌年、この雑草の生育とともにイネ白葉枯病の細菌が増殖し、一次伝染源となります。細菌は田面水や用水に入り、それらが風雨によって飛ばされてイネに感染します。そのため、梅雨期の長雨や台風による強風と大雨によって発生が助長され、特にイネが冠水すると本病がまん延することがあります。



図1 白葉枯病の感染葉



図2 激発水田での発生状況（全体的に白い）

### 3 防除対策

既に発生が見られるほ場では早急に薬剤防除を行いましょ。昨年発生が多かったほ場でも出穂3～4週間前に防除しましょ。幼穂形成期から出穂期までに発生が目立ち、台風が多く多雨の年には出穂期以降に多発し、減収などの激しい被害となる恐れがあります。

浸冠水しやすい水田では、用排水路の整備を行うとともに、畦畔等の除草を徹底して第1次伝染源であるサヤヌカグサを除去しましょ。

また、多肥条件で栽培すると感染しやすくなることから、窒素質肥料の過用を避け、適切な肥培管理を行いましょ。

なお、イネの品種によって発病程度に差があり、愛知県の平坦地で栽培されている品種の本病に対する抵抗性は、あきたこまち、コシヒカリ、あさひの夢、ゆめまつりは中、あいちのかおり SBL と大地の風はやや強となっています。

薬剤は、いもち病防除にも利用されているプロベナゾールやチアジニルまたはイソチアニルが有効です。育苗時に本薬剤を含む箱施薬（Dr. オリゼフェルテラ粒剤、ブイゲットフェルテラ粒剤、ルーチンエキスパート箱粒剤など）を行った場合も、出穂3～4週間前に表を参考にして薬剤散布を行いましょ。

表 イネ白葉枯病に対する主な生育期散布防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	本剤の使用回数	FRACコード
オリゼメート粒剤	プロベナゾール	移植活着後及び出穂3～4週間前（但し、収穫14日前まで）	2回以内	P2
ルーチン粒剤	イソチアニル	収穫30日前まで	2回以内	P3
ブイゲット粒剤	チアジニル	葉いもちの初発20～7日前（但し、収穫45日前まで）	2回以内	P3
オリブライト1キロ粒剤	メトミノストロピン	出穂10日前まで（但し、収穫45日前まで）	1回	11

FRAC コードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRAC コードの詳細は、[http://www.jcpa.or.jp/labo/jfrac/pdf/code\\_pdf01.pdf](http://www.jcpa.or.jp/labo/jfrac/pdf/code_pdf01.pdf) を参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。